

第59回中学生作文コンクール

都道府県別賞一等

祖父からのラブレター

新潟県 新潟大学附属長岡中学校 二年生

佐々木 芽依

私が生まれる前、私は祖父を亡くした。父が十五歳の時、祖父は病気で亡くなった。父には兄がいて祖母は一人で育てるのに苦労していたらしい。それでも経済的に苦しいという訳ではなかった。それは祖父が生命保険に加入していたからだ。結婚する前まではろくに貯金すらしてこなかった祖父が急に自分から保険に入るといいだったので祖母はとても驚いたらしい。でも祖母は、家族を大切に思っている事が伝わり嬉しかったようだ。生命保険について詳しく知らない私は、父に聞いてみた。

生命保険。それは私にとって不思議なものだった。世の中に数多く存在する保険の中で特に生命保険は不思議だった。父は、

「芽依にも自分の命より大切な存在ができたら入る必要があると思うよ。」

と言ったが、私はよく理解できなかった。大切な人のためと言っても自分の命に値段がつけられているみたいで嫌だった。自分が亡くなった代わりにお金が支払われるなんて、まるで命とお金の交換みたいだ。人の命をお金で測るような感じた私は少し悲しかった。何より、遺族がお金を受け取るのは自分が亡くなった後だ。つまり家族の喜ぶ顔を見る事ができないのだ。それは少し寂しいように私は感じた。

父から聞いた話によると、遺品整理の際、机の引き出しから手紙を見つけたらしい。当時の父には分からない資産の事も書いてあったが手紙の最後は「ありがとう」で締められていた。祖母と父は涙を流した。祖父はお金と命の交換だなんて考えず、ただ純粹に家族に心配をかけたくなかっただけなのだ。喜ぶ顔を期待した訳ではないのだから自分が亡くなった後でも関係なかったのだ。例え、自分の命に値段がつけられているように感じて、亡くなった人が生きた人に送れる最後のメッセージなのだ。家族に心配をかけたくないという一心で加入したのだろう。そう思うと手にしたお金はどんな大金よりも重く感じたそうだ。

生命保険とは自分のために加入するものではない。自分より大切な誰かができた時にその誰かのために加入するのだ。実際、まだ大切な人がいない私は加入していない。病気やケガをした時に出る給付金は入院代に当てる事ができるが、死亡保険金は人が亡くなった時に出るのだ。私のようにまだ大切な人がいない人は亡くなってもお金が必要になることがないのだ。生命保険に加入して

第59回中学生作文コンクール

いないからといって決して愛されていない訳ではない。自分が愛す番の時に加入するのだ。

後で知った話だが、外国では生命保険の事を「ラストラブレター」と言うらしい。愛する家族に向けた最後のラブレター。自分の命と引き換えに家族に送った最後の手紙。この世界では保険に加入できる状況でも加入しない人がいる。その人達は、やはり私と同じようなイメージをいっていると同時に、いざという時が起らないと考えているらしい。もしもがない日なんてない。常に死の危険と隣合わせでありながら生きているのだ。私の知っている詩にこんな一節がある。「たしかに明日はやつてくる。でもそれがわたしの勘違いで今日で全てが終わるのだとしたら、わたしは今日、どんなにあなたを愛しているか伝えたい」これはアメリカ世界同時多発テロにより息子を亡くしたノーマ・コネット・マレックさんによるものだ。そのテロは予測されたものではなかった。その人に会う事が最後と分かっていたら誰だってお礼を言って、今後に備える事ができる。しかし、「死」は予測不可能なのだ。そのもしもに備えた最善の方法が生命保険なのだ。普段は分からない大切さはその時に初めて分かる。生命保険だってそうだ。私も大きくなって大切な家族ができたら手紙を書こうと思う。自分のためではない。大切な家族のために。生命保険という手紙を。